

## アウエーからホームの門へ

美月麻希

大阪文学学校に入学したものの何ひとつわかっていない自分に気づいた二〇〇四年春。送られてきた原稿の書き方について的小冊子を見ながらため息をついた。ミステリーやハードボイルドばかりを多読し、小説をわかつたつもりでいたし、大学を卒業してからタイプライターで鍛えられブラインドタッチでさくさく文字が打てるうえに、ネットのバイク関連の掲示板に書く文章がおもしろいとみんなに言われるのでいい気になっていた。

原稿の体裁はわかったが、いったい何を書けばいいのか？当時所属していたツーリングクラブのリーダーがいわゆる変人で彼を主人公にしようかと考えて書き始めたが、バイクに乗っている彼しか知らないのに向に筆は進まない。やはり、自分のことか……。ちょうど離婚してから七年くらい経過し、人生のリセット時期にいた。心のなかにはいつも「何が悪かったのか？」という答えのない自問自答がある。「リスタート」というタイトルではじめての小説を書き始めた。

毎日ポストを開けるのを楽しみにしながら批評が返ってくるのを待った。通教部の木下チューターから戻ってきた批評

を読み「気持ち悪い」という言葉に衝撃を受けた。もうすぐ二十年になるうかというのに、そのショックは今でも覚えていいる。たぶん誉め言葉もあったとは思うが、いっさい記憶にない。

通教部の作品集が送られてきて、再度ショックを受けた。みんなうまい。スクーリングが怖くなった。こんなに何もわかっていなくて批評などできるのだろうか？

とほとほとスクーリングに向かった。

熱のこもった長谷川龍生校長の講義も上の空で、パイプ椅子に座って様々な老若男女を眺めていた。だけど、誰も知らないその空間は妙に居心地がよかった。クラス別のスクーリングが始まり順番に批評がまわってきたが、何をしゃべったのかまったく覚えていない。ただ、時間の経過とともにどんな体が熱くなり脳の細胞がふくらんでいくような気がした。作品批評を聞きながら、思いもよらない感想があることに驚き、なぜ「気持ち悪い」と書かれたのかがおぼろげながらわかってきた。自分を悪者にしたくなかったし、可哀そうだったんだ、と。可哀そうな自分に自己陶醉していた。そんなも

のを読んで、誰がおもしろいと思うのか？

身体に残る熱に動かされて『鍵』に取り掛かった。半年ほど前にマンションに空き巣が入り、元夫からもらった大きなダイヤのリングを盗まれた。仕事から帰ると家が妙に埃っぽかった。何かがおかしいと頭のなかで警報が鳴り響く。着替えようとして隙間風に気づいた。サッシ戸の鍵の部分だけガラスが綺麗に切り取られているのを発見。背筋がぞっとした。警察がやってくるかわかって、部屋干ししていた下着やら散らかった衣服を慌てて片付けた様子を細かく書いた部分を木下チューターに褒められた。その書き方が描写だとはじめて理解できた。『鍵』は『樹林』の通教作品集に掲載された。

二〇〇五年は父が亡くなり、休学したが、ホスピスでの出来事や父が七転八倒苦しむ様子でさえ、小説のネタにしようと考えてる自分を見つけた。文学がわたしのホームになっていったのだ。

文学学校に入るまで、家族や学校の友だちといどもどこか空虚だった。高校のコーラス部では仲間がたくさんできてコンクールで全国大会に出場してテレビに映っても冷めていた。要領がいいのでどこでも友だちはできる。大学や就職した会社でも、明るくふるまえたし人当たりがいいと言われた。だけど、結婚は要領だけでやり通すのは無理だった。お正月にみんなが集まって楽しく団らんしている時間が苦痛で、いつもアウエーな感じがつきまといっていた。そして破綻。何もかも失くした。

研究科になってから『テネシーワルツ』という小説で父の

死を描き、読んでくれたのが今所属している同人誌『白鴉』の藤本氏で白鴉に導かれた。例会は恐ろしかった。空気がびりびりと震えているように感じた。文学学校の通学のクラスにも通ったが、批評の深さと鋭さがまるで違う。辛辣な批評をもらったときは、二週間ほど立ち直れない。酷評した人に憎しみすら感じた。誰かを憎んだのは生まれてこのかたはじめてだ。真剣だから傷つくし、腹が立つ。今まで何をしてもクールでいられたのは真剣じゃなかったからだと気がついた。大阪文学学校がわたしにとってホームといえる文学への開かれた門だとすれば、白鴉は大きく立ちのぼる壁の重い扉。苦勞しながら、少し開き、こっそり覗き込み、身体を半分だけ入れてみて、おずおずと潜り抜ける。神経を張り巡らせ全身を晒してみると、温かく自分のすべてを剥き出しにできる場所だった。

ホームはただ居心地がいい場所ではない。試練に直面しても耐えて、次に進みたいと思わせてくれる場所。苦しさを吐露できる仲間がいる場所。文学は果てが見えない空間で、試行錯誤しながら、高みを目指しているつもりでも、実は降下しただけ、ということだってある。文学には一時的に機能不全に陥るようなことがあっても復活してみせる、と思わせてくれる魅力がある。アウエーにいるとただ逃げ出そうとするだけだろう。

軸足を白鴉に置いても、わたしはまだ一方の足を文学学校に置いていた。いつでも逃げ出せるように、だったのかもしれない。通学では平野さんと津木林さんにお世話になり、ま

た通教に戻って、詩の苗村さん、ライトノベルの真弓さんのクラスにも入った。自分の作品に対する迷いがあったからだ。白鴉はというと、だんだんと古いメンバーが辞めてしまい、新たにメンバー探しをした。

白鴉がわたしのホームの核となり文学学校を辞めた。休学を何度も繰り返し、二〇一五年の三月までで十一年も在籍していた。辞める決心がついたのは、平野さんや津木林さんとの縁で読書会に参加するようになり、新たに多くの知己を得たことも大きい。

三年経って通教部のチューターにというお話をいただいた。ホームの門を再び通り抜けると、まったく変わらない場所だったけれど、チューターという存在を理解できず文学学校のスクーリングを白鴉の例会の延長くらいに考えていた。ずっと「気持ち悪い」という言葉は自分への戒めとして大事にしてきたが、いつの間にかおどおどしていた自分は忘却の彼方へ……。白鴉目線で本科の作品を読んだとき、欠点ばかりが目について困った。だけど、数年経った今は、それが傲慢の現れだったとわかる。離婚して傷ついた自分を突き放して観ることができるようになる。木下チューターは助けてくださったのだらう、とはじめてわかった。書きたい想い、心の底にあるわだかまった何かを見つめるお手伝いをしたい、と思うように。時間をかければ技術的なことはだんだん身に着く。それよりもアウエーにいて息が詰まる思いをしている誰かのホームに文学がなれるよう手助けしたい。

チューター歴も浅いわたしだが、昨年には理事に推薦して

いただき就任した。今度は学生さん個人に向き合うだけでなく、ホームの門として大阪文学学校が存在し続けられるように努力したいと考えるようになった。立場が変われば想いも変わる。しかし、書き手としてはまだまだだ。最初に書いた『リスタート』は二〇二二年秋モチーフを変えて『マッスルメモリー』という作品として生み出した。やつとわたしは離婚という挫折を手放せたようだ。文学というホームは自分のなかにしつかりある。誰も奪うことのできない大切な場所。文学学校はその門に間違いはない。核となるホームができて、今までアウエーだと感じていた場所や人たちが温かいと感じるようになった。心を閉ざしたわたしが気づかなかっただけだったのだ。